

外国人が日本において就業しながら資格取得を目指す過程
—EPA インドネシア人介護福祉士候補者の学習における自律をめぐる考察—

専攻 人間発達教育
コース 教育コミュニケーション
学籍番号 M17009J
氏名 原 真奈美

1. 問題と目的

2008年から始まったEPA（経済連携協定）に基づく介護福祉士候補者は、日本語を1年間学んだ後、日本の介護施設で実務経験を積むため、就業しながら日本の国家資格である介護福祉士を目指す。EPAは、政府の枠組みでのプログラムであるが、就業中の学習支援は施設によって異なる。いかなる環境においても3年後の国家試験に合格しなければ、帰国しなければならない。そこで、この3年間を自律的に学習を進めなければならない。このような状況の中でどのように学ぶのか。また、外国人が学ぶ日本語教育は、日常生活で使用する総合日本語の他、介護の現場での専門日本語がある。さらに専門日本語の中にも仕事で使用する施設利用者がわかりやすい言葉と国家試験に出てくる専門用語は異なる。このように複雑で様々な日本語を学習しなければならない。

本研究ではEPAインドネシア候補者に学習で必要な「実践的日本語の学習」と「国家試験の学習」から以下の点の学びについて探る。またその中でどのような自律が垣間見ることができののかを探る。

- ① 「仕事や生活における日本語の獲得」をどのように学んだか
- ② 「介護福祉士国家試験に向けての学習」はどのように行われていたか

2. 先行研究

日本語教育についての自律性について大西（2006）は、日本語の技術や知識を習得するためだけではなく、社会的文脈の中での実践がある。本研究ではEPA候補者が教室や問題集の中でのみではなく仕事や生活においてどのように自律的に学んだかを見る必要がある。また梅田（2005）は、教師の役割について「計画者」「教授者」「ファシリテーター」「情報提供者」「改革者」の役割が重要だとしている。EPAには、日本語教師だけでなく、介護の専門家や施設の職員、ボランティアまで様々な人がいる。この人たちがどのように関わっているのかを見る必要がある。

また、介護福祉士国家試験問題についての研究では、非漢字圏の外国人にとっての漢字の難しさや問題の難解さについて（日本語教育学会ワーキンググループ, 2010）まとめられており、候補者がどのように学んでいたかを探る必要がある。この状況がどのようなことに影響を及ぼすかを探らなければならない。

登里他（2014）は、EPAにおける「現地（訪日前）研修→国内（訪日後）研修→着任後の継続研修」縦型アーティキュレーション（学習の連続性）（Tohsaku, 2012）を意識する必要性を述べている。学習中心である生活から就業中心の新しい生活、新しい職場でそれがどのように行われるのか。見ていくことにする。

3. 研究方法

手続き 仕事や生活、国家試験の学習の様子などについて、日本語教師である筆者による個別の半構造化インタビューにて行った。1人当たりの面接時間は65分～77分。なおインドネシア人は、約88%がイスラム教徒であるため、文化や社会的背景が異なる日本での学びという事情についてもとらえられるようにした。

調査対象 2013年から2019年に介護福祉士国家試験に合格したインドネシア人の男性3名と女性2名の合計5名。

分析方法 質的研究法として修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA:木下,2014)のワークシートを用いて概念化し、それらをテーマごとに分類し、それらの相互関係を図式化してまとめた。

4. 結果

生活や仕事の日本語については、1年間学習した日本語は標準語であるのに対し、介護施設では方言が全くわからなかったこと、仕事で使用する報告表現などの日本語も学習したはずが、施設によってやり方が異なるため、学習したことが上手く使えなかったなどの「日本語の壁」への直面があることが語られた。だが同時に現場に慣れて施設の利用者との交流が楽しくなる学びから、自然に日本語が身に付き、日本語能力試験の自信へと繋がるという語りが見られた。

国家試験対策については、試験問題は外国人にとって、難解で複雑であるが、何度も何度も繰り返し問題を読み解いたり、様々な人とのネットワークを築き、周囲の助けを得ながら難しい問題にも挑戦していった。そのような中、他の施設の同期からは、気持ちを高めてくれる一方、施設による支援の違いを知ることで、気分

を落ち込ませたりもすることがわかった。そのような状況での息抜きで日本語のドラマや歌、クイズ番組などの視聴や利用者との楽しいおしゃべりなど、学習の目的を持たない学習の合間の気分転換や趣味としての行為からも日本語を学ぶ様子が確認できた。

宗教について理解してもらえないことや、思い描いていた仕事内容との違いからショックを受けることもあったが、気持ちの切り替えを行い、状況に合わせて折り合いを付けながら「日本で生活する私」を作り上げた。また候補者は、周囲の職員や利用者をはじめ、様々な人々から仕事や生活の中で、生きた日本語を学んでいた。時には、その人々が候補者にとっての先生の役割を果たしながら接していた。

また仕事や学習において問題が生じた場合、自らが全ての問題を抱え込むのではなく、対処するための依存先を持つことが大切だということがわかった。こうした過程を経て候補者らは合格後の希望や、プレッシャー、自分で勝ち取った自信、試験前の不安を抱えながら国家試験に臨んでいる様子が見えた。

5. 総合考察

EPA インドネシア人介護福祉士候補者は、生活や仕事の日本語の獲得には、社会という実践の場で周囲と関わりながら、今ある環境の中で自分自身の学びを進めている。自律学習を促したり、阻んだりすることがある中、自己の学習スタイルを試行錯誤しながら作り出したり、問題が生じた時に、前に進むため頼れる依存先を自らが構築していくことと、その過程こそ自律学習につながっているといえる。

主任指導教員 中間 玲子
指導教員 中間 玲子